

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：87108

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16919

研究課題名(和文)近世西南日本の地域産業と対外交流の研究

研究課題名(英文)A study foreign exchange and local industry in southwest Japan during the Tokugawa period

研究代表者

一瀬 智 (Ichinose, Tomo)

福岡県立アジア文化交流センター・その他部局等・主任研究員

研究者番号：20543698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、近世の日本社会に深く根ざした対外交流の影響を、九州の陶磁器産産業を事例として明らかにしたことである。具体的には、江戸時代の肥前や天草における陶磁器産産業に着目し、磁器生産において絵付けに不可欠な絵薬の供給を長崎貿易による中国からの輸入に依存し、特に18世紀以降は不安定な輸入状況に生産が強く影響されたことを明らかにした。さらに、陶磁器の全国各地への流通網の分析から、生産地にとどまらない国内社会への広範な影響の波及について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、これまでの長崎をはじめ貿易「窓口」をフィールドとした近世貿易史の視点、あるいは鉱物・海産物など主力輸出入品の産業史研究に埋没し、見逃されてきた、地域産業と対外交流との関係に光を当てたものといえる。近世の肥前や天草の磁器産産業を対象として、九州における対外交流活動が地域の産業に深く結びついたその実態を明らかにした。それによって「窓口」としてだけでなく、社会に深く対外交流の影響が浸透していた近世の西南日本の地域社会像について、新たな議論を提示できたと考える。

研究成果の概要(英文)：The result of this study is to clarify the influence of foreign exchange deeply rooted in the modern Japanese society in the case of the ceramic industry in Kyushu. Specifically, focusing on the ceramic industry in Hizen (Saga, Nagasaki) and Amakusa (Kumamoto) in the Edo period, the supply of porcelain paints depended on imports from China, and production was strongly affected by the unstable import situation after the 18th century. In addition, from the analysis of the distribution network of porcelain nationwide, we considered the widespread effect on domestic society beyond the production area.

研究分野：日本近世史

キーワード：対外交流 地域産業

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古来より日本列島における対外交流の窓口として歴史を刻み続けた九州は、近世「鎖国」制度下においても、長崎・対馬・薩摩(琉球)という3つの対外窓口を有し、そのことが特色ある地域社会の醸成に大きな影響を与えた。中でも近世最大規模の貿易窓口であった長崎では、北部九州諸藩がその警備を勤め、またその警備をきっかけに設けられた諸藩の出先機関(蔵屋敷)が、政治的な交渉や情報の収集・交換のほか、輸入品の調達や藩産品の販売・輸出の窓口という、藩経済上にも重要な役割を果たした。それにより、長崎と九州・山口の諸藩領域、あるいは他の幕府領域の間を、多くの人・モノ・情報が行き交ったことが、これまでの研究で明らかにされている。

本研究が対象とする、「鎖国」制下における対外貿易と国内産業との関係についても、輸出品であれば金・銀・銅の鉱業や、海産物、肥前産陶磁器、樟脳など、輸入品であれば生糸や絹・綿織物、薬種、砂糖などの貿易品について、特に貿易史側からのアプローチにより、多くの指摘がなされてきた。しかしここでは、貿易品目とその量・額が主な論点であり、その産業と貿易活動の関連が、産業が立地する地域にどのような社会・経済的影響を与え、地域社会にとって如何なる位置にあったのか、という点については、近年、見いだされつつある段階であった。国内産業や地域の視座からの実証的研究も、鉱業や海産物に厚い研究史があるものの、他の産業には見ることはできない現状にあった。

2. 研究の目的

九州・山口地域は、地域社会の政治・経済・文化の多方面において、対外交流の影響を大いに享受した地域である。したがって、地域産業においても対外貿易と密接に関連したあり方が、今まで知られている以上に広範に存在したことが想定された。本研究はこれまで貿易史の視点、あるいは全国規模の産業に埋没し、見逃されてきた国内、特に九州・山口地域の産業と貿易活動の関係について実証的研究をおこない、「鎖国」制下の西南日本地域の社会像について新たな論点を提示することを目的とした。

具体的には、当初、熊本県天草地域における近世の陶石採掘・製陶業を対象としたが、史料的な制約の問題が生じたこともあり、天草に限らず肥前の磁器生産地についても研究対象とし、長崎貿易との関係、およびその関係が産業や地域に及ぼした社会・経済的影響について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1)中国から唐船によって輸入され国内の磁器生産に用いられた茶碗絵葉(呉須)に注目し、「鎖国」制度下における絵葉輸入量の変遷を整理した。また佐賀藩藩政史料や有田の皿山代官日記、天草の上田家文書に残る史料から磁器生産地への供給状況を把握して、輸入状況との相関関係について分析した。

(2)上田家文書に残る史料から、具体的な陶石の移出先や絵葉を用いる磁器の生産地を抽出し、貿易の状況に大きく影響を受けた絵葉の具体的な供給先について分析した。

(3)天草や肥前など九州産陶磁器の流通についても磁器生産に関わる産業と捉え、特に文献資料から具体的な様相が明らかにされていない日本海沿岸への供給方法について、出土資料や伝世資料のほか、福岡藩藩政史料や対馬宗家文書などに残る史料から分析した。

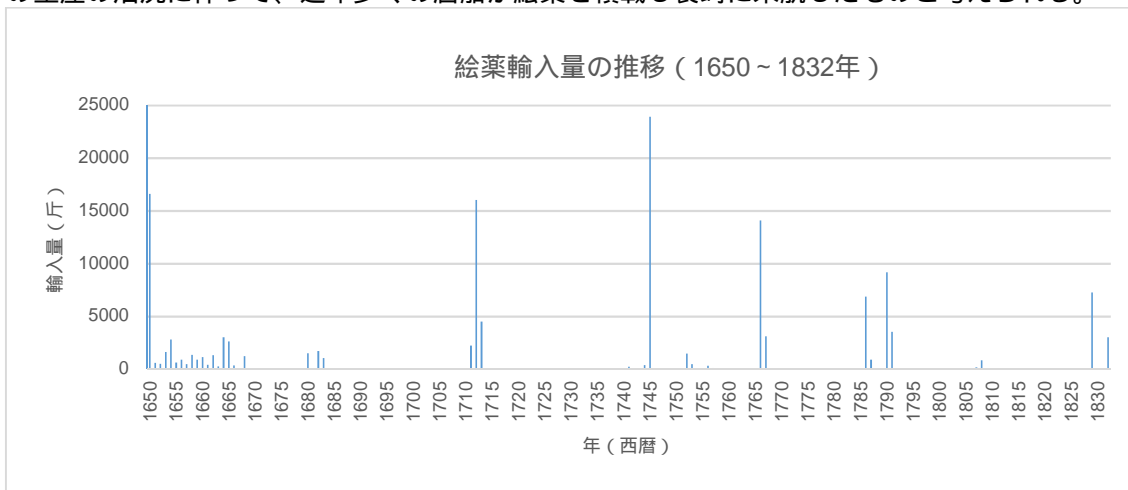
4. 研究成果

(1)『唐船輸出入量数量一覧』(永積洋子編、創文社、1987年第1刷)、「唐壘貨物帳」(国立公文書館所蔵)、T・フォルカー『磁器とオランダ連合東インド会社』(『伊万里市史 陶磁器編 古伊万里』、2002年、549頁)から、1650年から1832年にかけて唐船が積載して長崎にもたらした絵葉の輸入量を抽出、整理した(グラフ参照)。

まず、1650・1712・1745・1766年に15,000斤前後かそれを超える量の絵葉の輸入があり、5000斤を超える輸入も18世紀終わり以降に複数みられる。だが1669~79年、1684~1710年、1714~24年など、および1824~26・28・30年は輸入品目・量がわかるデータがそもそも残されていない一方で、1725~1740・42・43・46~51・54・55・59~65・68~85・88・89・92~1806年、1809~1823年は輸入品のデータは確認されるが絵葉の記載がない。つまりグラフに輸入量が「0」と表れている年でも、1725年を境にその以前と以後で同じ評価はできない。

この前提を踏まえて、改めてグラフを詳細にみると、1650年代に絵葉の輸入が開始された直後からおよそ20年間は、連年数百~数千斤の輸入があった。グラフには表われないが、この期間には1隻あたり数十~数百斤を積載した船が複数来航して絵葉をもたらしている。1680・82・83年、および「唐壘貨物帳」が残る1711~13年も同様の来航・輸入状況が認められる。このため、データに欠ける1669~79・81年や1684~1710年も、同じような状況にあったことが想定できる。この時期は、明清交代の混乱から清の遷海令による海禁政策によって中国磁器の対外的な輸出が大幅に減少し、それに替わって日本磁器の対外輸出が開始され、拡大した時期である。そ

の生産の活況に伴って、連年多くの唐船が絵薬を積載し長崎に来航したものと考えられる。



次に、1725 年以降に目を向けると、いくつか突出した量の年がみられるものの、輸入は散発的となる。また具体的には、同じ年に複数の船で輸入されたあり方が、1 隻の船で多量に輸入するあり方に替わることも指摘できる。特徴的な例を挙げると、1712 年に輸入された 16,050 斤の絵薬は 9 隻の船が順次もたらしたが、1745 年の 20,000 斤は東埔寨船 1 隻によって輸入されたものであり、1767 年の乍浦船も一度に 12,700 斤を輸入している（1767 年はこのほかに 2 隻の乍浦船が 900 斤と 500 斤を輸入した）。このような 18 世紀前半を画期とする変化の要因として考えられるのが、1715 年発令の正徳新例による貿易額制限である。多くの船が積載した主要な輸入品から絵薬が消えるのは、中国商人にとって利益率の良い商品ではなかったということだろう。

その結果、絵薬は国内で供給不足となり価格が騰貴する。それは次のような 18 世紀中葉から 19 世紀前半の磁器生産地の史料に伺うことができる。宝暦 3 年（1753）には「絵薬高値二付而八、已前之通焼物出来立不申、殊之外不出来仕、釜焼及難儀」と有田の窯焼きの訴えがあった（『皿山代官旧記覚書』宝暦三酉年日記、『伊万里市史 陶磁器編 古伊万里』551 頁）。天明 4 年（1784）からは佐賀藩・平戸藩が絵薬の供給量不足に対応するため、將軍献上品のためとの名目で 1 ヶ年に各 1000 斤・500 斤の絵薬買受を幕府に保証されている（寛政 3 年（1791）『長崎会所五冊物二』、『伊万里市史 陶磁器編 古伊万里』555 頁）。天草高浜村でも宝暦 7 年（1757）に入札ではない絵薬の買受が認められた。だが輸入絵薬の品質が悪かったため、長崎商人が買い込んだ絵薬を調達し用いていたが、「近年持渡之絵薬」も至って悪質で、肥前伊万里でも使われないために、長崎商人の絵薬も払底してしまっていると訴えている（上田家文書 4113 14-92-4「乍恐願上候御事」）。供給量不足や品質悪化の問題は肥前有田でも同様であった（『皿山代官旧記覚書』享和二戌年日記、『伊万里市史 陶磁器編 古伊万里』556 頁）。これに対して天草高浜村では、明和 4 年（1767）に「上品之茶碗絵薬三百斤」の輸入を中国商人に発注するよう、長崎奉行に願い出ている（上田家文書 4113 14-92-4「乍恐願上候御事」）。安永 8 年（1779）にも「茶碗絵薬上品」の輸入が近年ないため、長崎奉行に中国商人への「御誂え」を願い出た（上田家文書 4027 14-56「焼物山仕立方并紅毛渡被仰付候覚日記」）。

またグラフにしたデータのうち、1766 年に輸入された 14,100 斤の絵薬はすべてアンチモン（黄色）1786 年の 6870 斤はすべて「赤絵具」であり呉須ではない。他の年になく集中してもたらされたこれらも磁器生産地の需要に応じたものと思われる。このように 18 世紀中葉以降の絵薬輸入は、輸入量減、品質低下、上質な絵薬の困り込み、価格騰貴が慢性化する中、国内の市場状況や生産地からの発注によって、不定期にもたらされていたと考えられる。

(2)上田家文書 4031 14-60「近国焼物山大概書上帳」は、寛政 8 年（1796）に天領天草の支配を預かる島原藩の大横目大原甚五左衛門の要望により上田源作（宜珍）が作成した「近国皿山人高凡窯数并出産之焼物大概」、つまり西日本各地の陶磁器生産地について、規模や焼物の種類、天草陶石の利用などについて書き記したものである。その概要を一覧表にすると次のようになる。

所在地	皿山数	焼物の種類
肥前領有田内皿山	10	全て南京焼
肥前領有田外皿山	12	全て南京焼
平戸領皿山	5	全て南京焼
唐津領皿山	3	茶碗類 1、不明 2
柳川領皿山	2	南京焼 1、赤土焼 1
薩摩領皿山	5	南京焼 1、高麗焼 3、呉須茶碗類 1

肥後領皿山	3	南蛮焼 1、赤土焼 1、南京焼 1
筑前領皿山	2	南京焼 1、赤土焼 1
豊前領皿山	7	南蛮焼 1、赤土焼 6
長門領皿山	2	赤土焼 2
伊予国皿山	1	南京焼 1
讃岐国皿山	1	不明 1
日向国皿山	1	南京焼 1
対馬国皿山	1	南京焼 1
肥前領小田 皿山		赤土焼
安芸国広嶋皿山	1	南京焼 1

肥前領(佐賀藩領)を中心に九州および中四国地方の多くの陶磁器生産地で南京焼(色絵磁器か)や「呉須茶碗類」が作られていたことが確認でき、そのような情報が天草で把握されていた。長崎に輸入された茶碗絵薬は、各地様々な入手ルートを通じて、それぞれの生産地に供給されていたと考えられる。

(3) 1610年代に生まれた伊万里焼は、すでに1630年代には京都の文化人の間で珍重される存在となっていた。やがて一般庶民の生活必需品としても大きな広がりを見せ、17世紀から19世紀まで、三都をはじめ全国各地の城下町や宿場町などの在郷町、さらには蝦夷地(北海道)の交易地やチャシ(城柵施設)など多くの埋蔵文化財調査で九州産陶磁器の出土例が報告されている。

飛行機や鉄道が生まれる以前、海に囲まれた日本において物資の大量輸送を担ったのは廻船であった。特に江戸時代には、米、塩、昆布・干鰯等の海産物など全国的な需要を持つ商品の流通が発達し、海運による流通網が形成された。そのような流通網に乗って、江戸時代の九州産陶磁は全国展開をみせた。

若狭国小浜(福井県小浜市)は、京都へ通じる日本海の港町として古くから栄えた。この小浜について、同地の町人木崎惕窓が宝暦7年(1757)に記した『拾椎雑話』(福井県立博物館所蔵)に「元禄の頃まで西国唐津船毎年四月に來り。土橋より北の大溝まで十間ほどに小屋をかけ、いまり焼物見世を出し、町在とも此來るを待居て、多くの商ひいたし候事二ヶ月斗。元禄末より京清水焼多く來て、唐津舟も小屋かけ致程の商もなく、今は止し。」という記述がある。元禄の頃、つまり17世紀末まで、毎年4月に伊万里焼を載せた「唐津船」が小浜に入津し、2ヶ月間ほどの「伊万里焼物見世」が設けられ、小浜の町や近隣の村々の住民はこの機会に、多くの伊万里焼を購入していたという。しかし元禄の末よりは京都の清水焼が多くもたらされるようになり、毎年4月の唐津船や、それに伴う伊万里焼物見世もみられなくなった、ということである。この記述は、伊万里焼の流通のあり方が、元禄末期の1700年ごろを境に変化したことを示しているのではないだろうか。つまり17世紀段階では、年に一度、まとまった量の伊万里焼が唐津船によってもたらされると、それに合わせて小屋掛けの見世が設けられ、販売されるというものだった。それが西廻り航路など商品流通網の整備と廻船業の発達によって、時期を限らず(航海が困難な季節はあるが)もたらされるようになり、やがては町の中に伊万里焼など焼物を日常に商う店が営まれるようになったものと思われる。京都に近い小浜では清水焼の影響も少なからずあったことも想定しなければならないが、伊万里焼は流通しなくなったのではなく、もたらされ方、流通のあり方に変化があったのであり、この後江戸時代を通じて、日本海沿岸にも多くの伊万里焼が流通した。

「筑前姪浜之者六人乗壹艘慶尚道蔚山塩浦へ漂流記録」(長崎県立対馬歴史研究センター(旧長崎県立対馬歴史民俗資料館)所蔵「対馬宗家文庫史料」記録類2 朝鮮方 A3)は対馬藩の朝鮮方で作成された、寛保2年(1742)に朝鮮国に漂着した日本人漂流民に関する記録である。筑前国姪浜(福岡市西区)の船頭仁兵衛以下6名は、筑前を出帆ののち焼物を積載して出羽国(秋田県・山形県)に赴いた。そして出羽で焼物売り払った後、帰り荷として米・小豆・煙草を買積み、佐渡・能登に向かったところで悪天候のため漂流、朝鮮半島南東部の慶尚道蔚山に漂着した。その後6名は、釜山にあった対馬藩の出先機関である倭館から対馬、長崎奉行所を経て福岡藩に引き渡され、朝鮮に漂着して4ヶ月ぶりに無事郷里へ帰還している。また享和3年(1803)の福岡藩「郡町浦御用帳」(九州歴史資料館所蔵「黒田家文書」388-B)には、筑前国志摩郡岐志浦(福岡県糸島市)の和三郎・伝吉の兄弟が「焼物商売」のために越中国(富山県)に滞在中、弟伝吉が病没したことについての記録が残る。岐志のほか久家・船越・新町(糸島市)など、福岡県北西部の糸島半島西端に所在する浦々には、同県北部の遠賀川河口地域に位置する芦屋・山鹿・柏原(福岡県芦屋町)などとともに、伊万里津から焼物、つまり伊万里焼を他地域へと運んだ多くの廻船業者が存在したことで知られている。この2つの例は、漂流や乗組員の病没といった不慮の事態に伴って記録されたものだが、そこから焼物流通の具体的なあり方を知ることが

できる。そしてその背景には、特別な記録に残されることのなかった数多くの船によって、日常的に多くの焼物が流通していたことが想像される。

江戸への流通については、佐賀藩士の記録を元に明治期に写された『伊万里歳時記』に、「伊万里積出陶器荷高国分」という佐賀藩への調査報告が収まる(前山博『伊万里焼流通史の研究』、1990年、357～362頁)。それによると、天保6年(1835)に伊万里から全国に積み出された焼物は総計31万俵、このうち三分の一を越える11万俵が江戸に運ばれている。そしてこのうち江戸で販売されたのは6万俵、残り5万俵は関東の各地へと運ばれた。それに続くのは3万6千俵の大坂、1万6千俵の伊勢、1万3千俵の備前であり、あとは数千表以下となる。ちなみに越前以北の日本海沿岸には3万俵が運ばれている。また『伊万里歳時記』は、これら大量の焼物について、20万俵を「筑前商人」、6万俵を「紀州商人」、その他を「伊予・出雲・下ノ関・越後」など諸国の商人が運んだと記す(前山博『伊万里焼流通史の研究』、365頁)。実際に、代表的なところでは紀伊養島(和歌山県有田市)や伊予桜井(愛媛県今治市)の船が、近隣地域特産の漆器を西国にもたらし、その帰り荷に伊万里焼を積んで大坂や江戸へと運んだことが知られている。

筑前商人による江戸輸送の様子は、天明4年(1784)の福岡藩「郡町浦御用帳 雑之部」(九州歴史資料館所蔵「黒田家文書」382-B)にみえる。前年の秋のこと、新町浦(糸島市)の吉蔵以下7名が伊万里焼を買い入れ、「平戸日佐浦」(平戸藩領志佐浦カ、長崎県松浦市)の船を借り、兵庫(神戸市)まで輸送した。さらに兵庫の廻船問屋にて「紀州日伊浦」(和歌山県日高町)の小山屋が所有する1200石積みの大型船を借りて焼物荷物を積み替え、江戸へ向けて出帆した。紀伊半島を廻って志州鳥羽湊(三重県鳥羽市)に寄港し、さらに東に進もうとしたところ、強い西風に遭い行方不明となってしまった。兵庫で船を変えたのは、北部九州から瀬戸内海と、それ以东の外洋とは、海洋状況が大きく異なるためであろう。

17世紀から19世紀という200年以上におよぶ長い時間のなかで、流通にも時期による様相の変化が必ずあったものと思われる。そのような変化の中で成熟していった流通のあり方が、江戸時代を通じた九州産陶磁器の全国展開、そして生産の発展を支えていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----